教育の力と形

田代　知美

秋に市内の小・中・養護学校の児童生徒が一堂に会する音楽会が三日間に亘ってあった。合唱や吹奏楽、マーチング、管弦楽等々それぞれの学校のスタイルで参加する会だった。MはA小学校の吹奏楽部の部員として参加した。私は三時間もいなかったのだが、素直に音楽というものが持つ力に改めて驚いたり、感動したりするとともに、へそ曲がりな性格が頭をもたげて、素直にではなく大人と子ども、先生と生徒のことを何となく考えていた。列の形態を変えながら演奏するマーチングというものには、一糸乱れずという形態に興ざめした。素直にではなくという点では、すんなり興ざめできた。幼児が運動会で組体操をするのを見たときと同じだった。いやその時ほどではなかったか

もしれないが、一緒にみんなで何かを作りあげようという気持ちを育てることと一つの形を作る事を目的にするのは別だよなあ……というような感じだったと思う。

でも中学生の合唱を聴いているときにはこれとはまた違う複雑な思いが生じた。四、五校の合唱を聴いたと思うが、校内の合唱祭で勝ち抜いた二クラスが合同という参加が多く、指揮も制服姿の男子生徒がぎこちなく棒を振っていた。どちらかというと無表情に朴訥に唱っているようであった。しかしメッセージ性の強い歌も多かった。「消えた八月」という原爆を扱った歌を聞いたときには、歌声の束の直球を投げつけられることによって、原爆が投下された時の状況が浮かび、凍り付くような感じを憶えた。もちろん姿こそ見えないが指導する先生が背後に存在しているだろう。一方、Mの学区域のA中学校はこのところ合唱が盛んらしく、つい先日は校内音楽祭を文化会館で行った。音楽の先生のすばらしい歌声は一度、小学校で聞いて驚いたことがある。A中学校の合唱はとにかくうまく、しかも感動的であった。生徒たちも生き生きとし、指揮をしている先生は服装や動きからしていかにもプロだった。素直に感動したのであるが、しかし頭では、やっぱり指導者次第なんだと納得せざるを得ないのかなあ、教育っていうのは集団催眠なのかなあと、これまた半ば素直にでなく思ったりもした。そう思うとMの小学校の六年生と吹奏楽部員が初めて合唱で舞台に立ったり、三階席まである大きなホールの最前列に陣取って彼らが座っているのもこの先生の力のように思えてきた。A中学校だけでなくA小学校の親たちも何だか浮き足立ち、A中学校の合唱は地域の親たちの希

望の星のような存在にも思えた。

その夜、Mに「A中学校の合唱どうだった?」と聞くと「すごかったねえー。本当にすごかったけど、でも何がすごいのかよく分からない」という答え。逆に「お母さんは何が一番良かった?」と聞き返され、正直に「『消えた八月』の歌かな」と言うと、「あーおんなじー。私たちって気が合うのかなあ。あれって原爆の歌だよね。聞いていてすごくよく分かった」。要は歌の内容がよく分かるか分からないかというだけなのかもしれない。でも改めてA小学校の子どものお母さんっぽく「A中行ったら、Mもああやって合唱やるんだねえ」と楽しみにしているかのように言うと「私はやりたくない」とそっけなく言われてしまった。それ以上理由は聞かなかったが、そのそっけない答え方で要は歌の内容がよく分かるか分からないかじゃないなあと思った。

私は私で、何か引っかかりを感じたまま過ごしていたので、立ち話の中で機会があると何気なくA中学校の合唱のことを聞いていた。お母さん方の話から察するに、今の音楽の先生が数年前に来た時に、先生は当然、部活動として合唱をやりたかったが、生徒たちは抵抗を示し、「色々あったのよ…」という、詳細は分からないが、様々な先生と生徒の間のバトルがあったらしい。でもなんとしてもあきらめきれない先生は、野球部や他の部活をやりながらでも合唱もやろうと声をかけたり、吹奏楽部の生徒たちに何とか合唱もやるように説得したりという過程があったようだ。そういえば卒業した野球部の生徒のお母さんから、息子が音楽の先生が好きだから合唱もやっているという話を聞

いたことがあったのを思い出す。発声練習や腹筋などかなり厳しく辛い練習らしいが、しかしやっていると確かに声そのものが変わるというのを生徒たちが実感するようになっていき、楽しくなるようだ。今も部活動として合唱部があるわけでなく、音楽祭に参加したのは選択科目として音楽を選択した生徒であった。その選択科目の音楽は希望者が多くて、ジャンケンに勝たないと選択できないほどらしい。なるほど、まず先生が歌うことが好きで、合唱がやりたいという強い希望を持って動いていた。そして生徒は最初は渋々だったかもしれないが、やっているうちに身体的な技を獲得するという実感をもった。この二つがちょうど良い接点を持っているのが現時点なのだ。プロセス抜きに今の「形」だけを音楽祭で目の当たりにすると、先生の力の大きさがとても強く感じられる。でもそれにしては生徒たちが生き生きしていることがよく理解できなくて私は引っかかりを感じていたのだろう。このようなことをあれこれ考えていると、誘導保育を連想してしまう。誘導保育は本来、大人が先に生活を楽しんでいる姿があり、それに子どもが引きつけられて参加していく中で保育をしていくプロセスだったのではないかと私は理解している。それを誘導保育という保育の「形」として見てしまうと、長期間に亘る大がかりな製作などを保育者がお膳立てしているように見えてしまうこともありうる。A中学校の合唱を「形」として見た私にはそのように見えてしまった。それまでのプロセスの中で先生が自分の楽しいこと、やりたいことを何とか実現しようとすることに引きつけられ、参加していく中で、子どもたちが技を身につけていったという点に

重きを置くと、その教育の力に納得がいく。

Mの話に戻るが、Mはこのところとても歯がゆい思いをしているように見える。地域の教育力というのが重視されて、学校・家庭・地域の連携で色々な催し物が計画される機会が増えている。舞台は学校だ。「何で日曜日なのに学校に行かなきゃならないの！」とブツブツ言いながら行く。行った先では、親や地域の人たちがボランティアで子どもたちを遊ばせてくれる。遊ばせてくれてはいるけれど、結局人数が多くなれば統制をせざるを得ない事態も当然生じるし、学校に行っているのと気分的には変わりのない休日なのだろう。何の悪気もなく、子どもたちのために休みを返上して大人は尽力してくれる。子どもたちのためにと思ってやってくれている。でもそれが子どものいらだちの原因になっていることに大人は気付きにくい。そのいらだちは、大人がお膳立てして、やってくれることそのものにあるのだから。子どもたちは自分たちで何かをやりたいのだ。大人の手が行き届き、やってもらうことに馴れてしまっている今の子どもたちだけれど、でもだからこそ、やってもらうのではなく、自分たちがかかわれることを探し求めてさまよっているように見えるのである。

そういえば、学校でのそういう行事には文句を言いながら参加するくせに、最近では東京湾の三番瀬の護岸掃除に参加したいと言い出した。「自分の部屋が三番瀬状態なんだからそっちを先に片づければ」と文句の一言も言いたいところだが、私も地域住民として関心があるので一緒に参加した。日曜日の午前中から大人と一緒に空き缶、瓶、

ペットボトルから乾電池や車の部品などをヘドロだらけになって集めている姿は、お膳立てしてくれて迎えてもらう関係でなく、大人と同じ方向を向いてかかわる関係を求めている子どもの象徴的な行動のようにも見えた。

A中学校の合唱も、Mから見れば先生がお膳立てして、自分たちはやらされる立場であるように感じられることに何となく抵抗を示しているのだろうと私は思っている。A中学校の音楽の先生と地域の教育力として子どもたちに何かをやってあげようとする大人とは、現時点では私の中では全く違う存在になった。しかしMにA中学校のこれまでのプロセスを説明したところで、大人の理屈になるので意味がないだろう。本人が出会ったところで考えていけばよいのだ。

教育というと、つい大人は子どもに向かい合って何かを提供することのように思いがちだ。でも子どものためという目的を持たずに先に生活する、先に必要なことをしたり、楽しんだり、問題意識を持って行動したりする様々な姿をそのまま見せてしまうこと。それに子どもが自ら引き込まれていき、同じ方向を向いてかかわることも教育であり、これが希薄になっているのが現代のようだ。子どもたちのためにという前提で、子どもたちに向かって力を使うのではなく、先に生活する姿を見せて欲しい、そこに引き込まれていきたいんだという子どもの思いに、私たち大人はどこまで気付いているのだろうか。

（お茶の水女子大学）